

国指定史跡 首里城跡

昭和51年度

久慶門遺構発掘調査報告書

沖縄県教育委員会

発刊のことば

この報告書は、沖縄県教育委員会が、国指定史跡首里城跡の戦災文化財復元工事の一環として、国庫補助を受けて、首里城跡の久慶門復元整備事業の事前遺構発掘調査の記録であります。

本報告書は、その概要であり、戦後埋没した首里城跡の久慶門はこのたび30年振りに掘り出され、今後の首里城跡の保存、復元整備に大いに寄与するものと思料されます。

なお、発掘にあたっては、調査委員会の先生方をはじめ、沖縄開発庁並びに文化庁の指導助言を賜わり、また国立琉球大学及び金秀建設㈱の御協力を頂いたことに対し、厚くお礼を申し上げ、発刊のごあいさつといたします。

昭和 51 年 11 月 30 日

沖縄県教育委員会教育長

仲宗根 繁

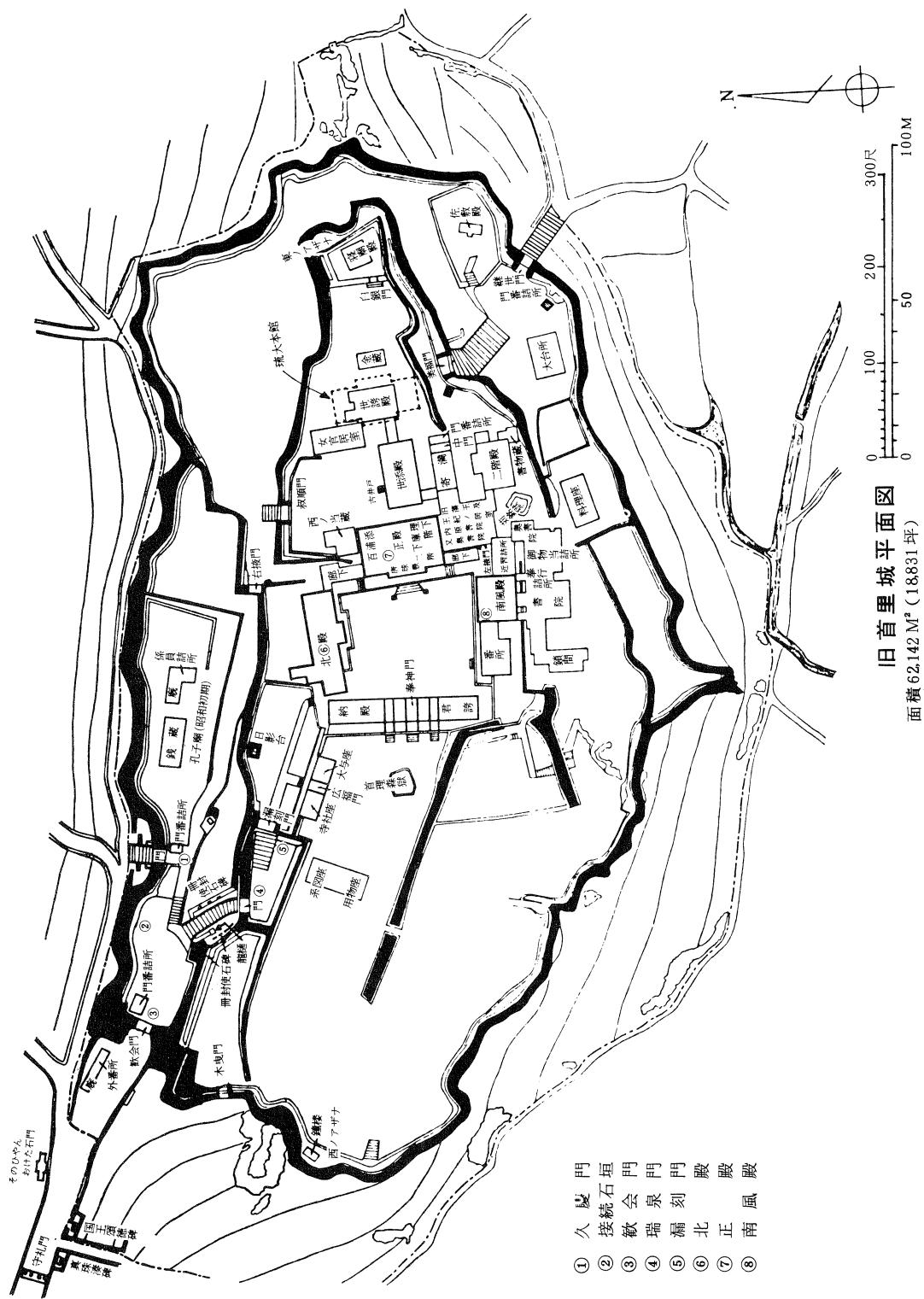
目 次

I	首里城跡と久慶門の概要	1
II	久慶門遺構発掘の概要	4
III	遺構と遺物	6
1.	遺構	11
2.	遺物	23
IV	結び	29

例 言

1. 本報告書は、史跡首里城跡における「久慶門」の昭和51年度の遺構発掘調査の記録である。
2. 本調査は、沖縄県教育委員会が、昭和51年度に国庫補助事業として、復元整備に先立って実施したものである。
3. 本調査の実施にあたっては、史跡首里城跡久慶門遺構発掘調査委員会が指導、監督し、金秀建設（株・社長 山里銀造）が発掘を実施した。
庶務は文化課で行った。
久慶門遺構発掘調査委員会・源武雄／多和田真淳／又吉真三
4. 本書の執筆、写真、実測及図面、拓本は又吉真三が担当し、監修は多和田真淳、編集は金城登吉が各々担当した。

I 首里城跡と久慶門の概要



1. 首里城の概要

首里城は、那覇市首里当蔵町の南側高台（標高約130M）にあって、旧琉球王国の王城であった。城の創建年代は不明であるが、『球陽』の察渡王の43年（1392年）の条に「高楼を建造して以て遊観に備ふ」とあり、沖縄最古の金石文「安国山樹華木記碑」（1427年）に、尚巴志が王城外の安国山に池をうがち、花樹を植えたと記録され、ついで尚泰久王が「万国津梁の鐘」（1458年）を鋳造し、「中山国王殿」の前に掛けさせたとあり、第一尚氏による三山統一後の王城として確立されたことが知られる。

その後、第二尚氏の尚真王、尚清王によって城域が拡張されたことが、「添継御門之北之碑文」「すえつぎ御門の南のひのもん」（1546年）に見え、今日の首里城の規模が出来上ったものと思われる。

城の正面は、那覇より東上する綾門大道（あやじよううふみち）に、国門の第一門である中山門、第二門の守礼門をへて、正門である歎会門に達する。外郭にはこのほかに久慶門（通用門）、継世門（裏門）の二門があり、内郭には瑞泉門、漏刻門、美福門、淑順門、白銀門などがあって、これら諸門を連結する石垣（城壁）は、内外から珊瑚石灰岩の切石を高さ6M～10M内外に積み上げ、外郭の諸門はいずれも石造アーチを架け（石造拱門）木造櫓を乗せている。

また内郭の門は白銀門を除き石造のアーチは無く、石垣に木造櫓を架してある。内郭には、正殿を中心に、南風殿、北殿が相対し、これを廻って書院、内原書院などがあった。

首里城は、明治12年3月（1879年）の廢藩置県後国有となり、その後首里市に拂下げられ、沖縄戦で建造物、城壁など滅失したが、昭和26年（1951年）に琉球大学が創設された。

昭和33年に守礼門、昭和49年に歎会門が復元し、接続石垣の復元工事が来春完了する。

2. 久慶門について

久慶門は、首里城外郭の北側にある石造拱門で、歓会門に連なる同一城壁にある。創建年代は、歓会門と同様文明9年(1477年)である。『南島風土記』91頁に次のように記されている。「王城外郭の西(北)にありて、第二門である俗に「ほこり御門」と称する、久慶はその対訳である。伊波本おもろさうし八の三一に、おもろねあがりや、あまへぼしや、ほこりぼしや、などとあって、「ほこり」は「あまへ」の対句同義である。この門は、国主物参の留守中は閉門される慣例になってゐる。」

『琉球』伊東忠太著72頁に、「先ず外壁の北門は久慶門と言ひ、俗にホコリ御門と言ふ。広さ9尺2寸(2.79M)、拱の高さ13尺(3.94M)で簡単ではあるが石の積み方が面白い」。

この門の構造形式は、歓会門と同規模であるが、前面の道路から門に至るまでの間が首里城の諸門の内では最も変化に富んでいる。即ち道の横手から、ゆるい数段の石階を登って正面に出る。正面には沖縄獨得の踏面が広く、ゆるい勾配のついた7段の石階を登り詰めて門に致るようになっている。

前記の伊東工学博士が「石の積み方が面白い」と言ふのは、のことと思われる。

また門の外側両脇には城内の湧泉からの石樋がある。この樋は道から見えないように「ひんぶん」石垣が左右対照的に積まれている。この樋泉のために俗に樋川御門(ヒーニャーうじょう)とも呼ばれている。

明治12年(1879年)の廃藩置県で首里城明け渡しの際に国王尚泰はこの門から退出されたという。

※註. ()内は筆者註。

II 久慶門発掘調査の概要

久慶門の発掘調査は、調査費4,184,000円で、国庫補助は50%￥2,092,000、県負担50%￥2,092,000で実施され、期間は昭和51年9月4日から11月30日までの3か月である。

久慶門は歓会門及び同接続石垣と連続した不離一体の門であって、首里城跡及周辺の歴史的環境と深い係りがあり、この門の遺構発掘調査によって昭和52年度から実施される予定の復元工事の資料を得るのが目的である。

門は戦災を受けて埋没してから約30年を経過している。発掘前の推定では少なくとも門及び石垣の下部 $\frac{1}{3}$ は残っているという予想であったが、東側の石垣は礎石のみ残るという砲爆撃のすさまじさを物語る。しかし西側石垣と正面階段は傷んではいるが、ほぼ遺構の全容が発掘された。

発掘にあたっては客土された上部は、パワーショベルで行い、遺構近くはすべて手掘りで行った。門内は城内の土砂で埋められ、外側の下部は城内の土砂、上部は客土されていた。その上にコンクリートブロック造の階段が作られ、通学路として利用されていた。

また門内南側には木造校舎があって、その側を通学路として変更し代替階段に接続したために防災扉を石垣添いに設け安全対策をした。

発掘調査は遺構発掘調査委員会規則と仕様書に従い指導監督を行い、金秀建設株式会社が発掘を実施した。

史跡首里城跡久慶門遺構発掘調査委員会規則

(目的)

第1条 史跡首里城跡久慶門遺構発掘調査を適正かつ円滑に遂行するため、史跡首里城跡久慶門遺構発掘調査委員会、(以下「委員会」という)を設置する。

(組織)

第2条 委員会は、事務局を県教育文化課内に置く。

第3条 委員会は、次の委員をもって組織する。

一、学識経験者3人以内

二、県教育文化課職員3人以内

第4条 委員長、副委員長は、学識経験者委員のうちから互選によって決める。

2. 委員長に事故があるときは、副委員長がその職務を代行する。

第5条 委員会には顧問を置くことができる。

(審議事項)

第6条 委員会は、次に掲げる事項を審議し県教育文化課に報告する。

- 一、事業の基本方針に関する事項
- 二、現状変更等、事業計画に関する事項
- 三、予算総額および工期の変更に関する事項
- 四、その他重要事項

(会議)

- 第7条 会議は、委員長が召集し、委員の過半数以上の出席により成立する。
- 2. 議事は、出席委員の過半数で決し、可否同数のときは委員長の決するところによる。
 - 3. 委員長が必要と認めるときは、委員以外の者を会議に出席させその意見を聞くことができる。

(業務)

- 第8条 委員会の委員は、事業期間中、発掘調査に関し指導監督を行うものとする。
- 第9条 委員会は、発掘調査が完了したらその結果を写真図示等による調査報告書を作製し、県教育庁に50部提出するものとする。

(幹事)

- 第10条 事務局には、幹事1名を置く。

(解散)

- 第11条 委員会は、史跡首里城跡久慶門遺構調査事業が完了したときは解散するものとする。

附 則 この規則は、昭和51年7月7日から実施する。

仕様書

この仕様書は、史跡首里城跡久慶門の遺構を発掘するために定める。

- 1. 調査場所 那覇市首里当蔵町3丁目1番地
- 2. 調査範囲 別紙図示の約500m²とする。
- 3. 特記事項
 - (1) 出土品等があった場合は、速やかに県教育庁に連絡すること。
 - (2) 業務完了後は、遅滞なく調査についての報告書を作製し、教育庁文化課に50部提出すること。
 - (3) 琉球大学校内への美化を阻害しないよう配慮すること。
 - (4) 講義に支障のないよう発掘すること。
 - (5) 調査区域内の排水管及び高圧ケーブル等の埋設物については、琉球大学施設部と調整のうえ発掘すること。
 - (6) 通学路の設置については、充分な安全措置を構じること。
 - (7) 立木については、琉球大学と協議して移植すること。
 - (8) 残土処分については、別に協議する。

III 遺構と遺物

1. 遺構

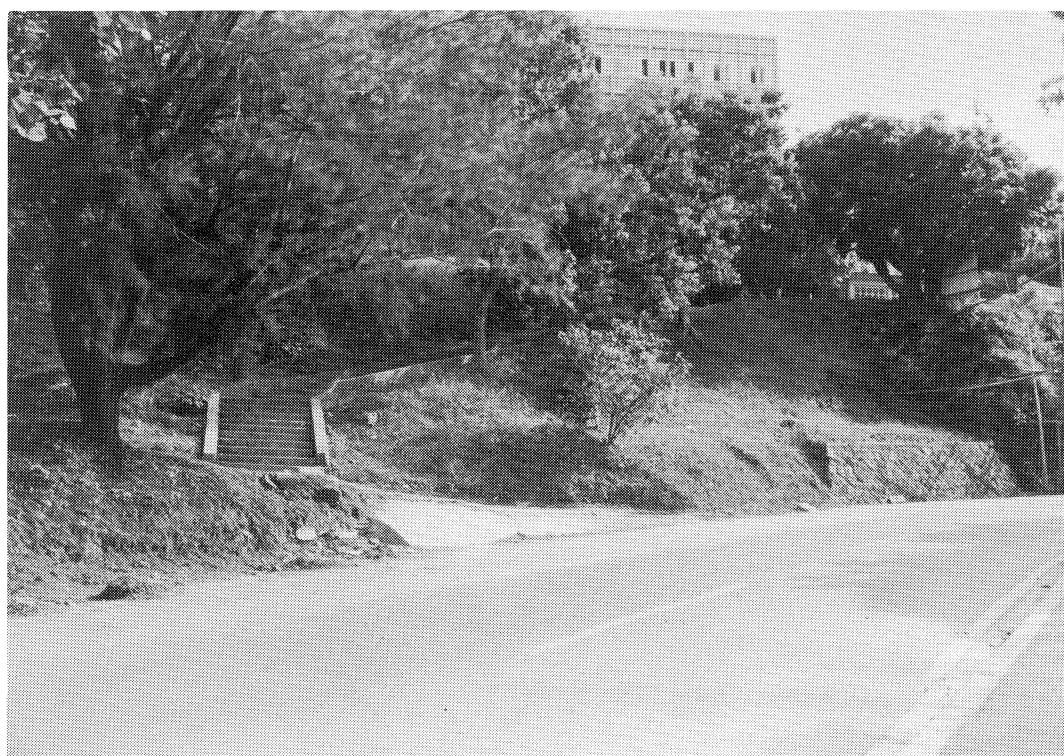
遺構は門の西側石垣は全面的に出て来たが、砲爆撃を受けているため上部は無く、下部 $\frac{2}{3}$ が総体的に損傷を受けた形で発掘された。東側は砲爆撃の跡が最もひどく、東隅の一部は $\frac{2}{3}$ が残っているにすぎない、そこから門に至る間は礎石のみを残し滅失に近い。道路から門に登る階段及びその袖石垣、両側の樋川の「ひんぶん」石垣など礎石が僅かに残っている状態で発掘された。樋川への通路の敷石は両側共或る程度残っている。

また西内側には、大正か昭和初期頃作られたと思われる石段と排水溝が出た。

2. 遺物

もともとこの門附近には東側奥に孔子廟があるだけで、遺物の出土は期待していなかったが、客土と共に城内からのものと思われる役物石材、赤・黒の瓦片、陶器片などが出土した。役物石材には正殿の前面勾欄持送り材、孔子廟のものと思われる礎石と礎盤、門両側の樋石などが主なものである。

また門の高さの中間附近には、門の中心を突切る形で、東西に琉球大学の施設として、水道管、排水管等4本、東外側に水道管1本、西側内部に排水管1本とマンホール2基、西外側にマンホール1基がある。



図版-1

発掘前の正面

1. 遺構



図版-2

発掘前の階段（通学路）



図版-3

発掘前、門の内側



図版-4

発掘中の正面



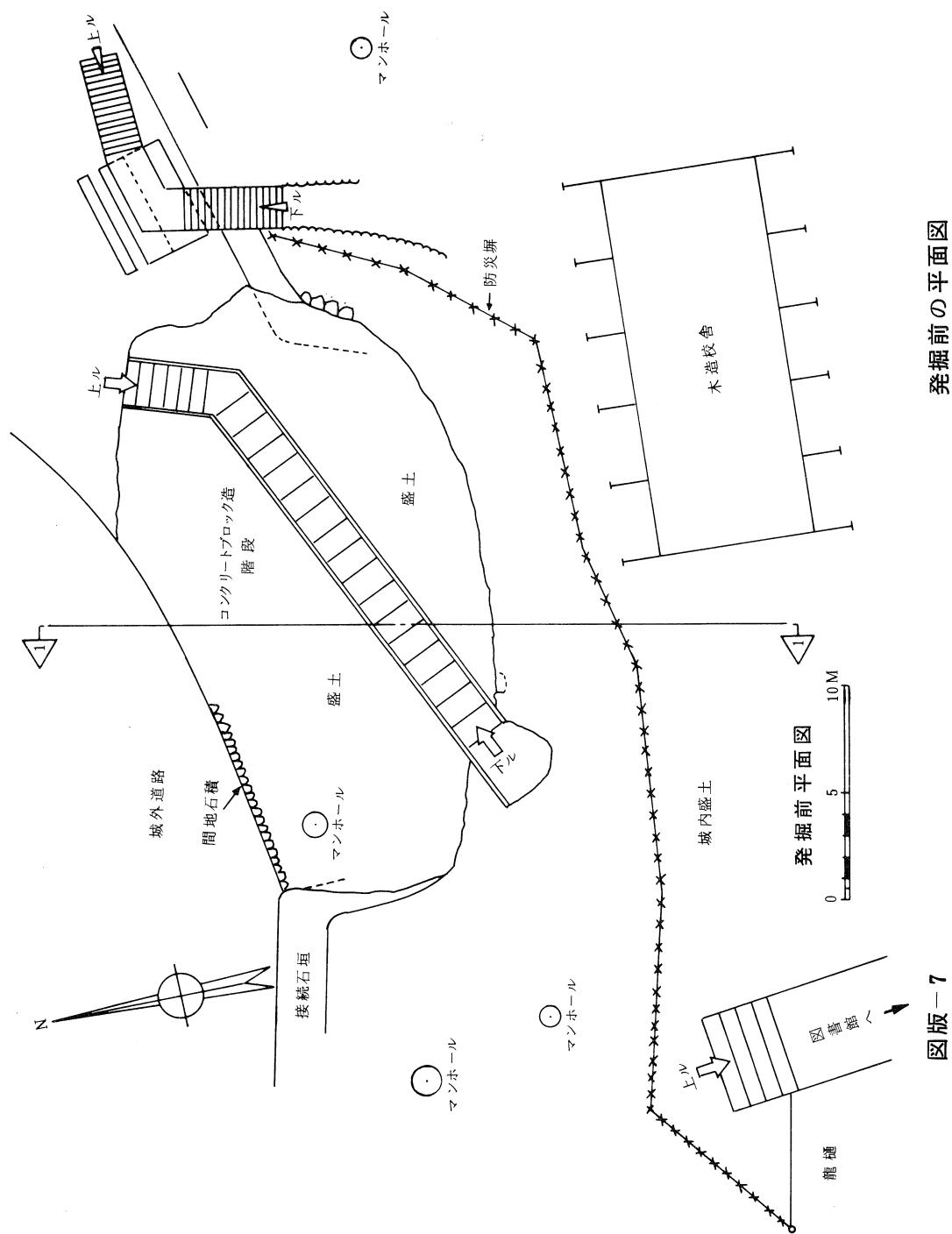
図版-5

発掘中の西側

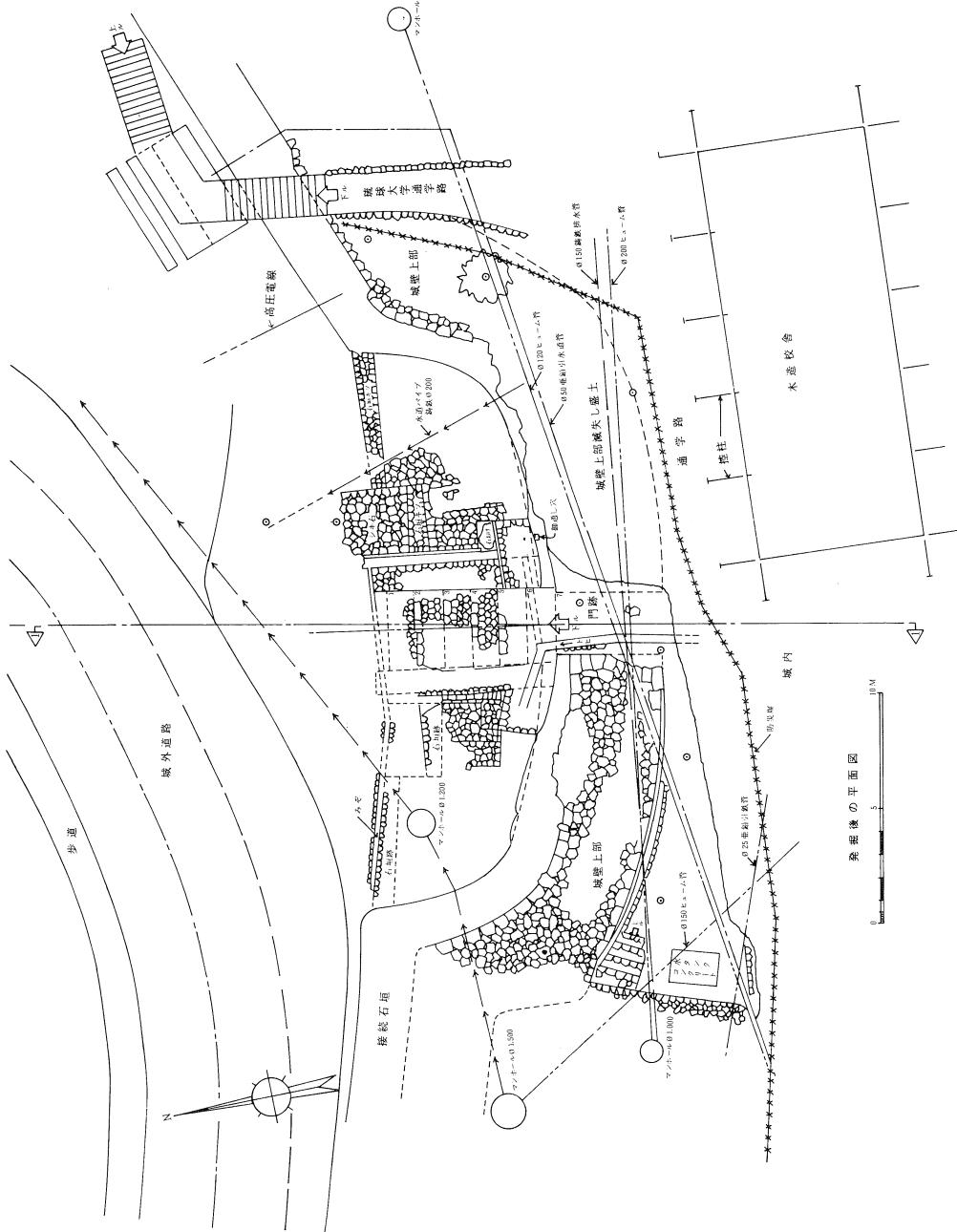


図版-6

発掘中の東側

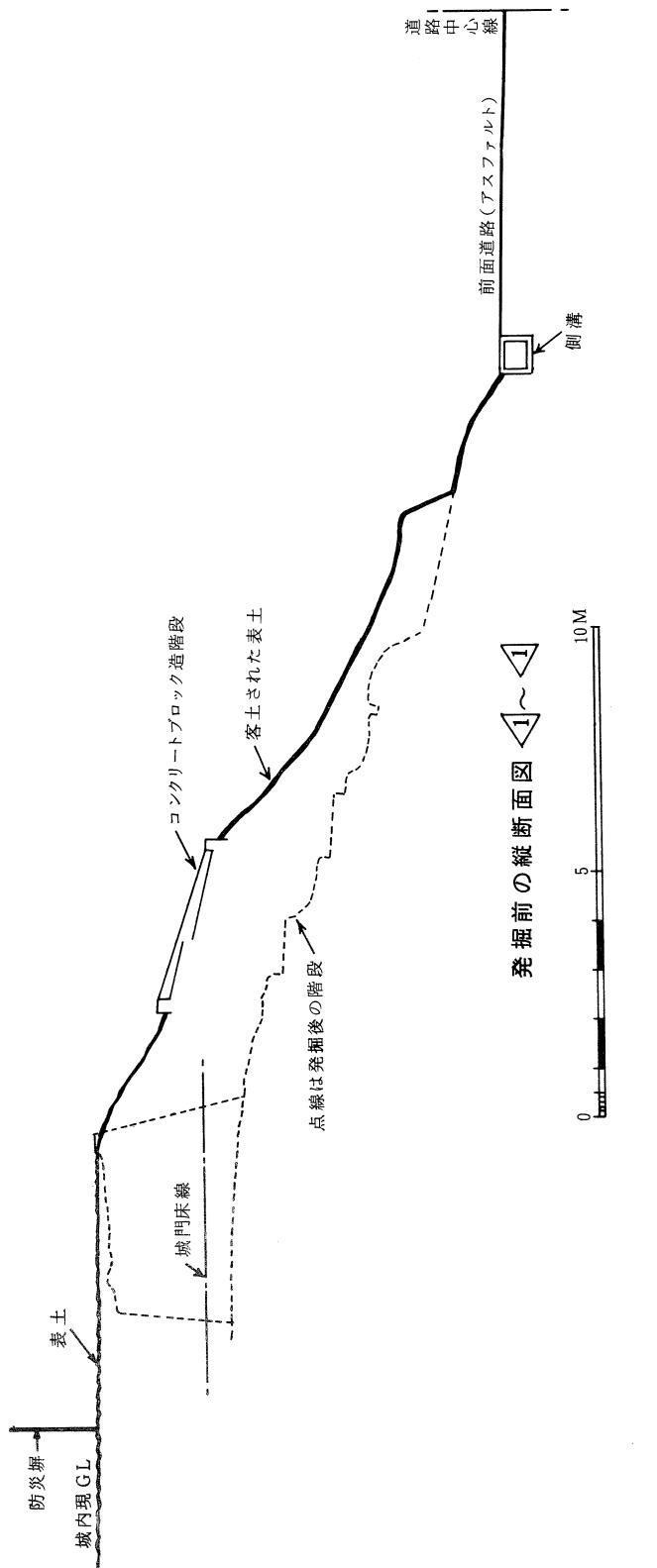


1. 遺構



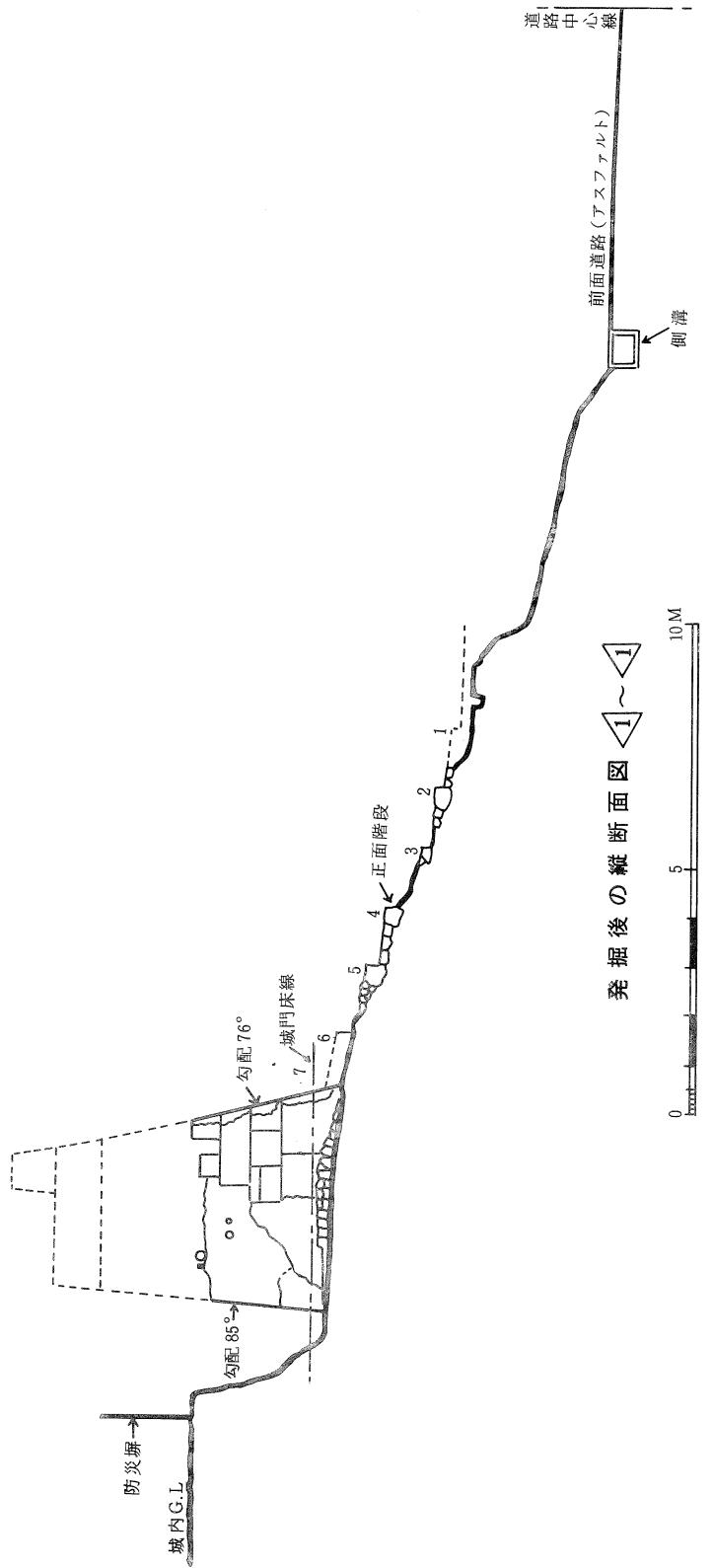
発掘後の平面図

圖版一



発掘前、縦断面図

図版一 9

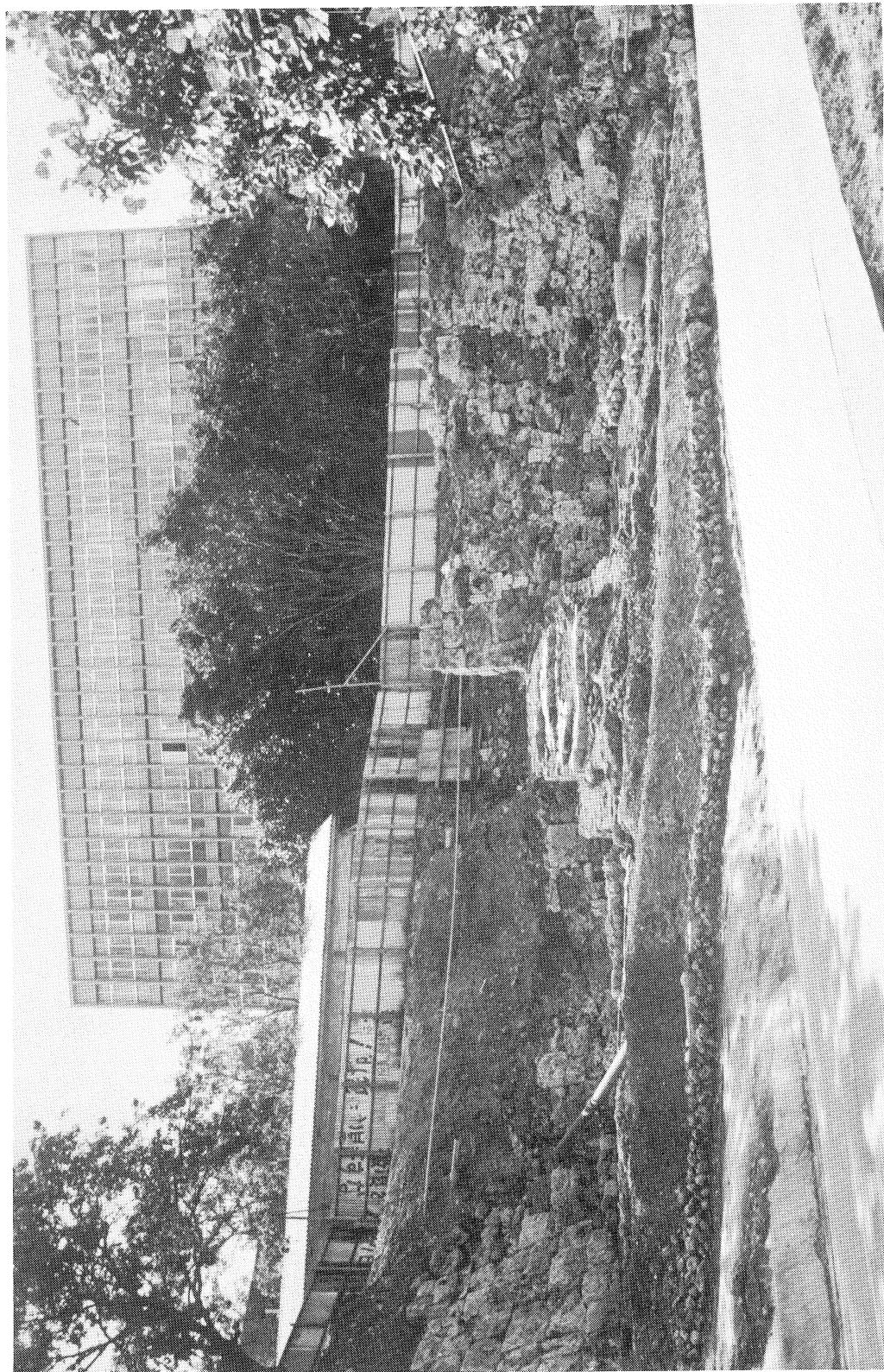


発掘後、縦断面図

図版-10

発掘後の正面

図版—11





図版-12

発掘後、歓会門及接続石垣との関係



図版-13

発掘後、城内よりの全景



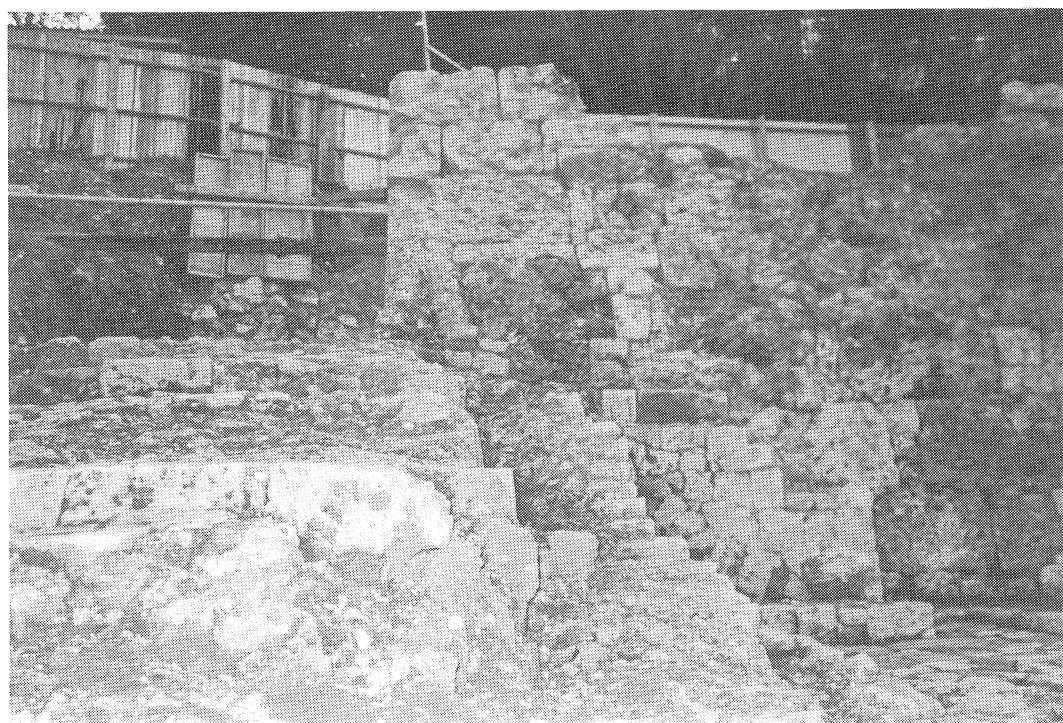
図版-14

発掘後、東側より西側を見る



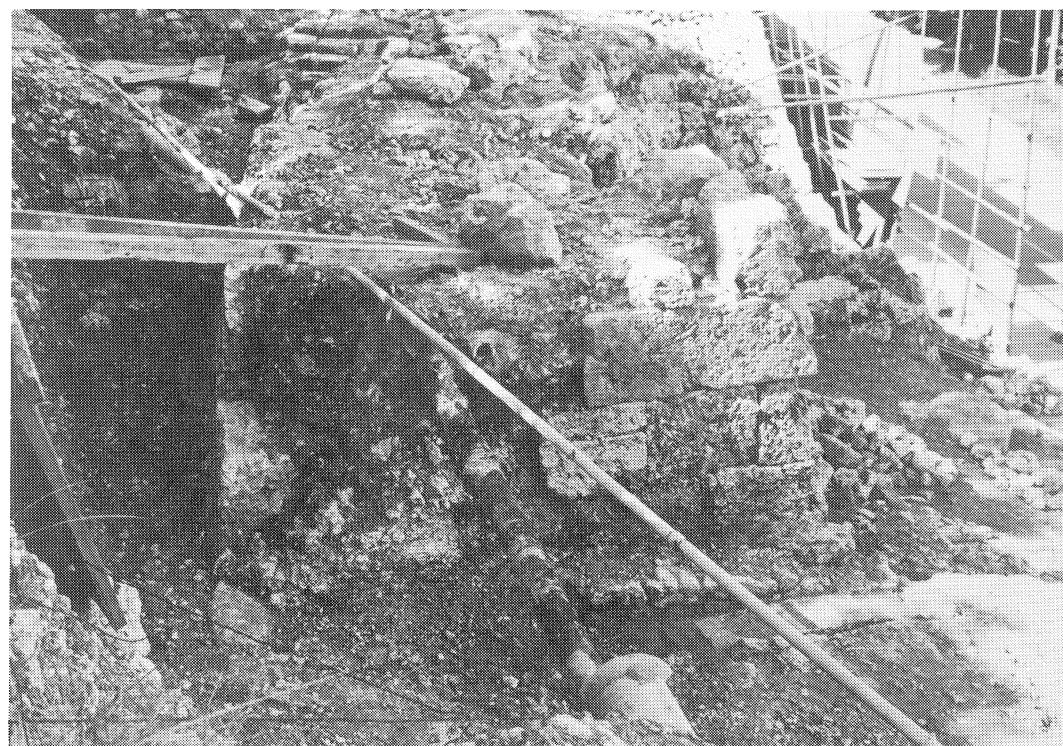
図版-15

発掘後、西側より東側を見る



図版-16

発掘後、正面階段



図版-17

発掘後、門石垣西側府瞰



図版-18

発掘後、階段府瞰



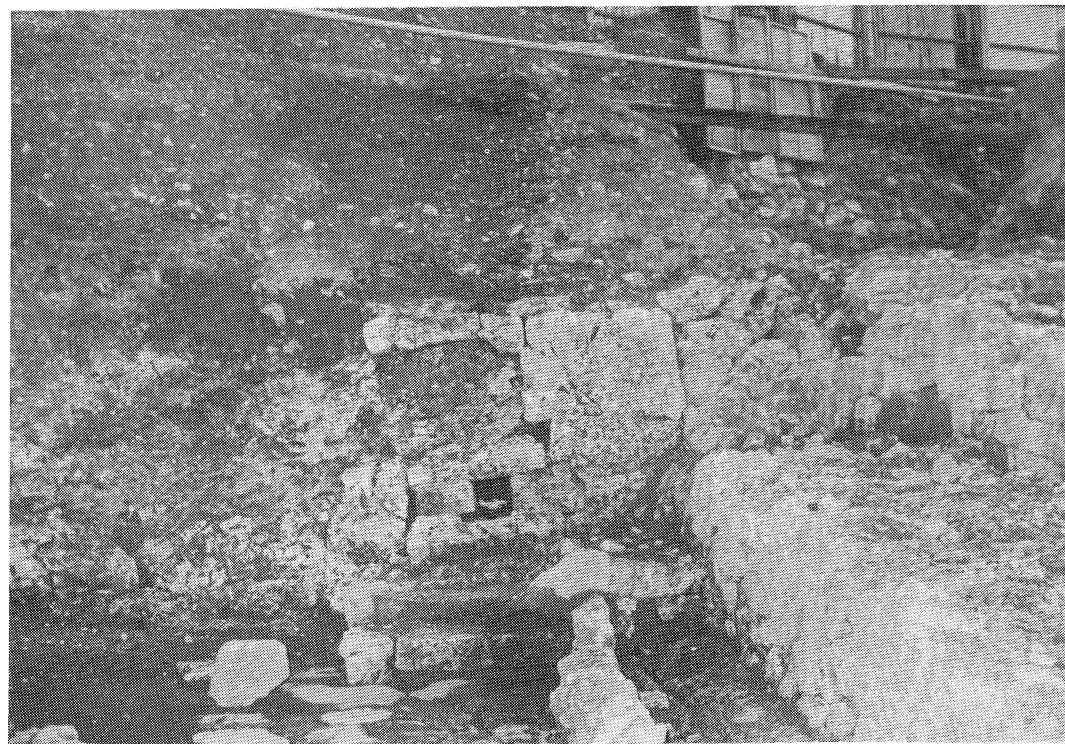
図版-19

発掘後、道路よりの登り口



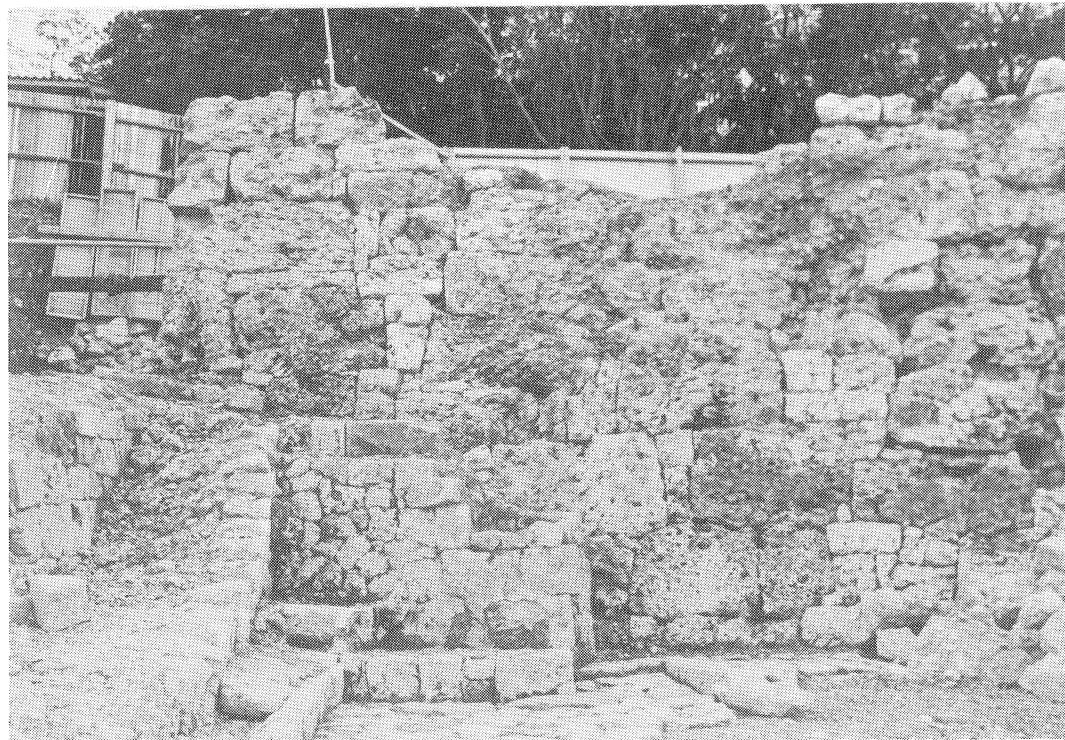
図版－20

発掘後、東側 石垣隅



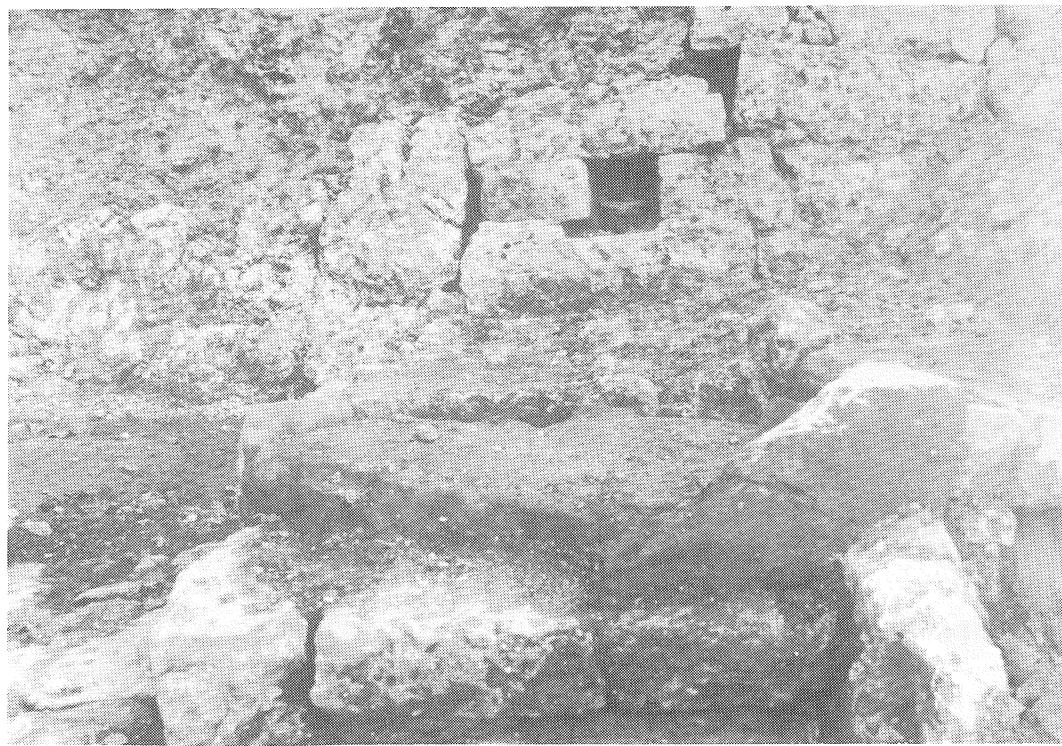
図版－21

発掘後、門の東側角と石垣



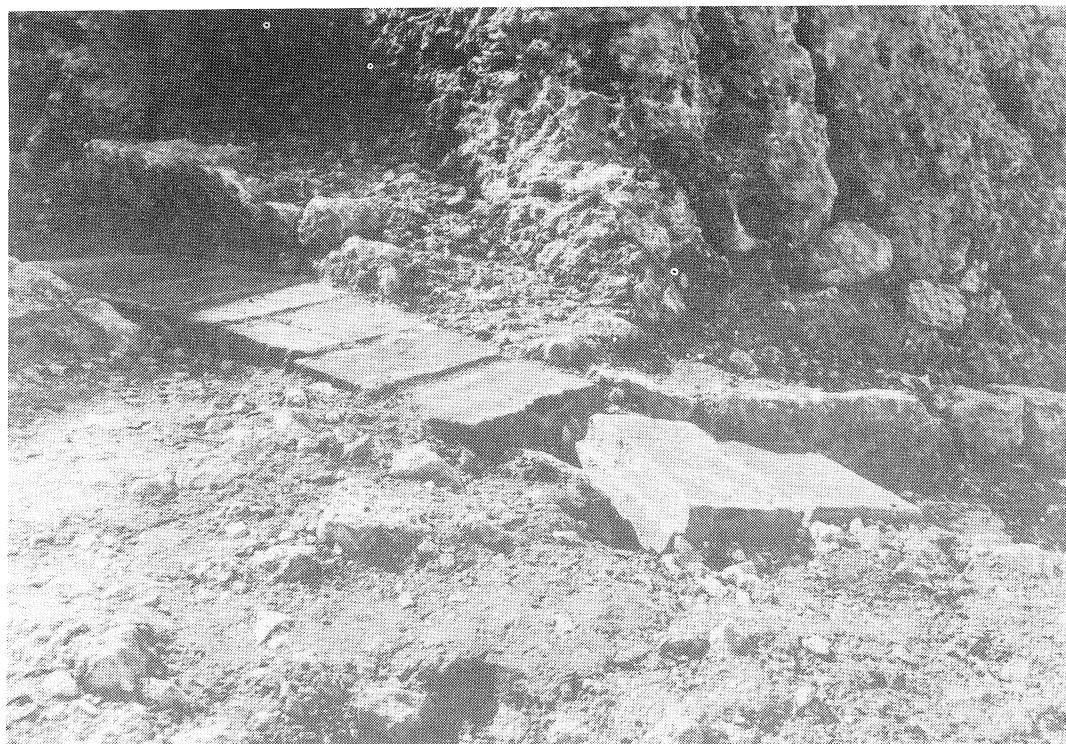
図版-22

発掘後、門の角石垣と西側石垣



図版-23

発掘後、門東側外の樋水受石おけと御通し穴



図版-24

発掘後、門の床敷石にある樋の蓋（厚手の磚）



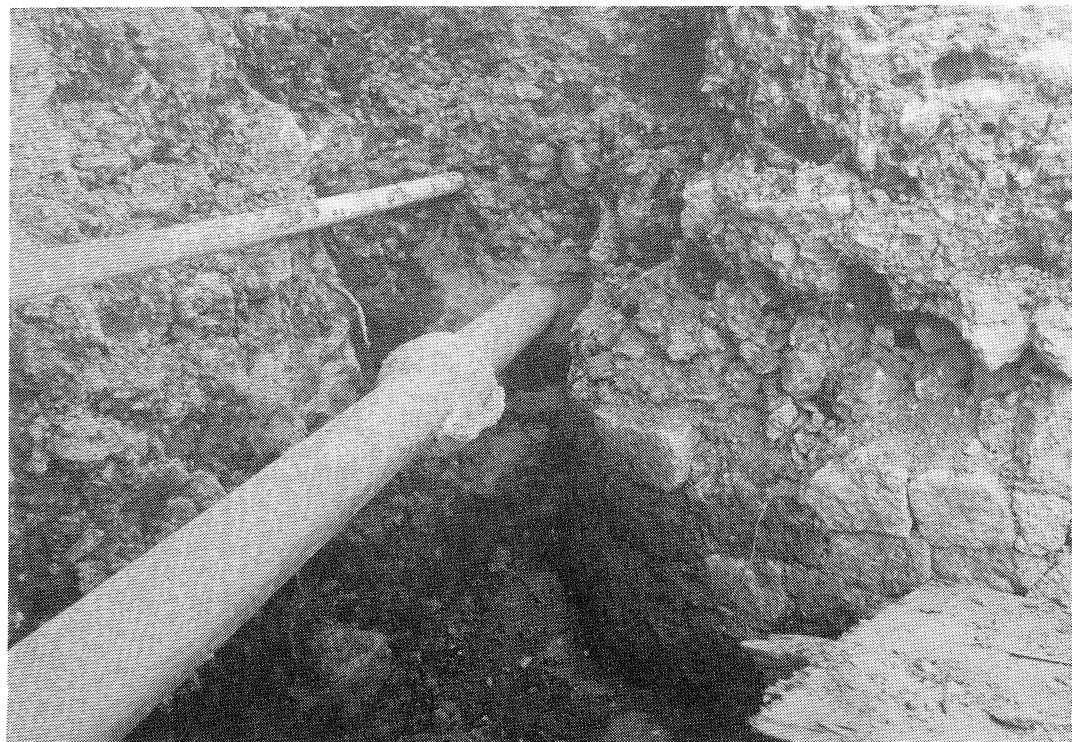
図版-25

発掘後、門内の被弾跡と配管



図版-26

発掘後、西側内部の新しい階段



図版-27

発掘後、瑞泉門への通路の石垣と配管

2. 遺物



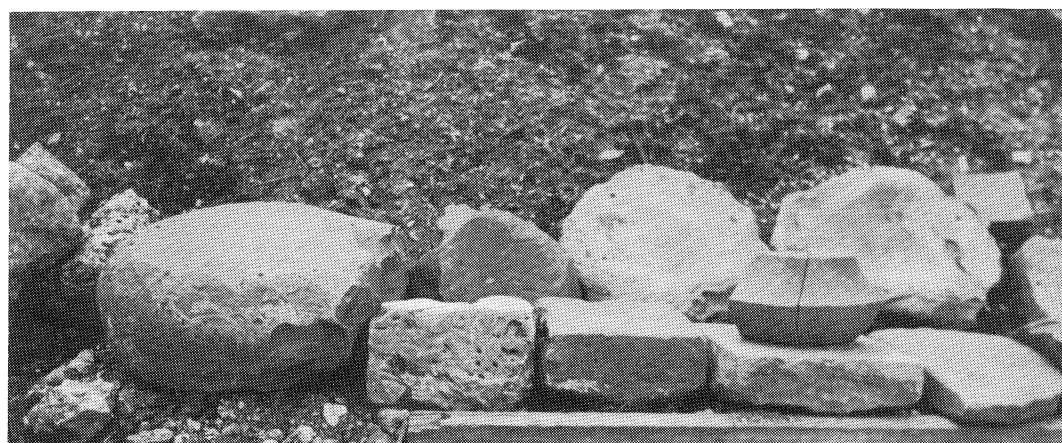
図版－28

門の両側の樋石



図版－29

正殿の勾欄持送り石



図版－30

礎石と礎盤



図版-31 础石と基礎盤



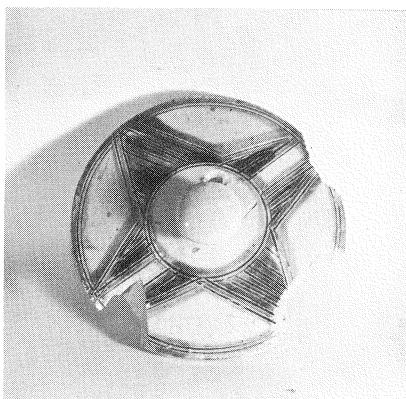
図版-32 角釘と銅錢



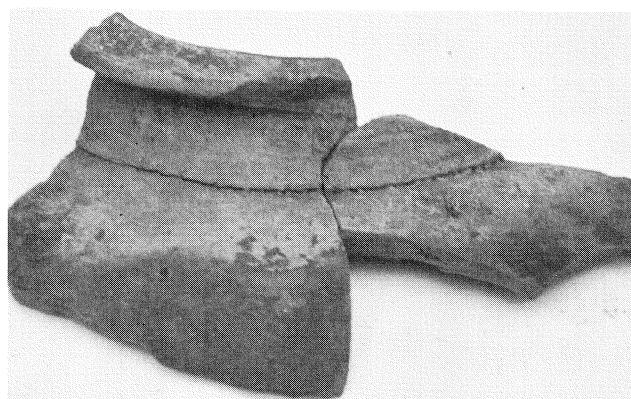
図版-33 勾欄束柱頭部



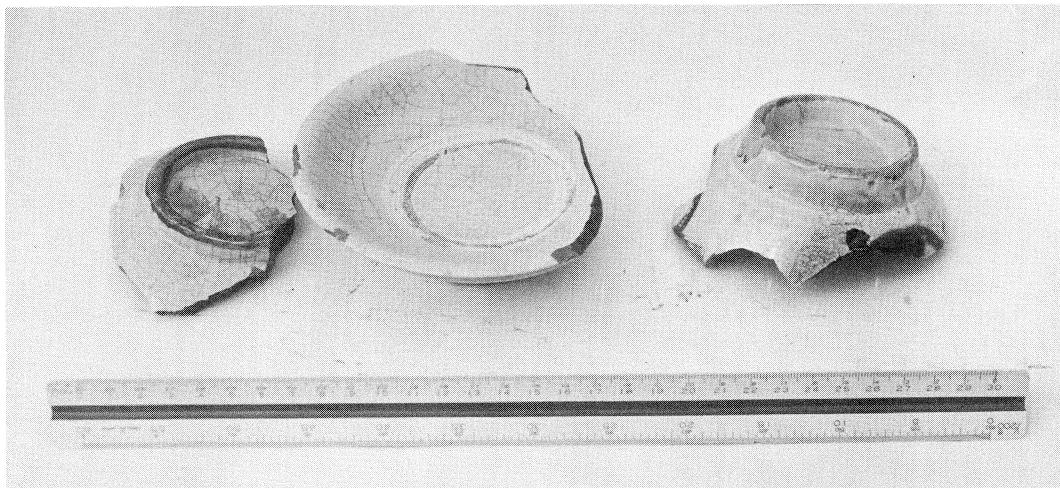
図版-34 香炉（壺屋焼）



図版-35 茶瓶の蓋



図版-36 南蛮瓶の口縁部



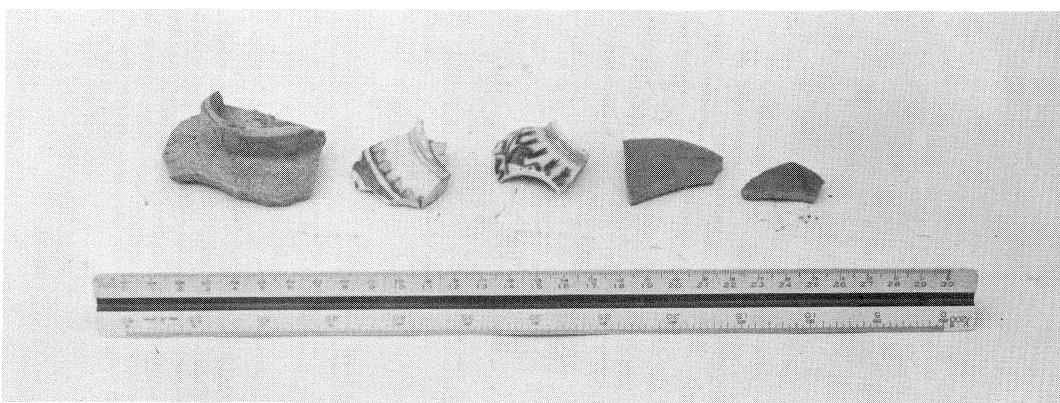
図版-37

陶器片（壺屋焼）



図版-38

陶器片（壺屋焼）



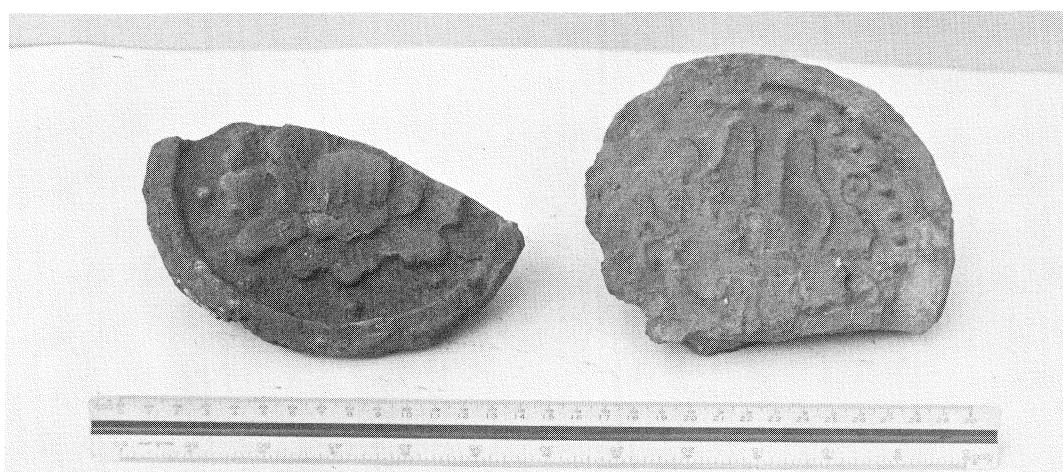
図版-39

青磁と白磁片



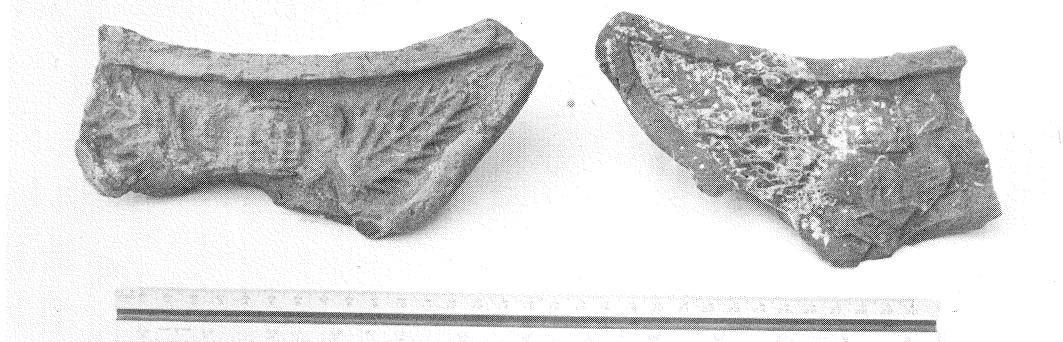
図版-40

唐草軒瓦 右黒瓦、左赤瓦



図版-41

唐草軒瓦 右黒瓦、左赤瓦



図版-42

唐草軒瓦 右赤瓦、左黒瓦



図版-43

黒男瓦片



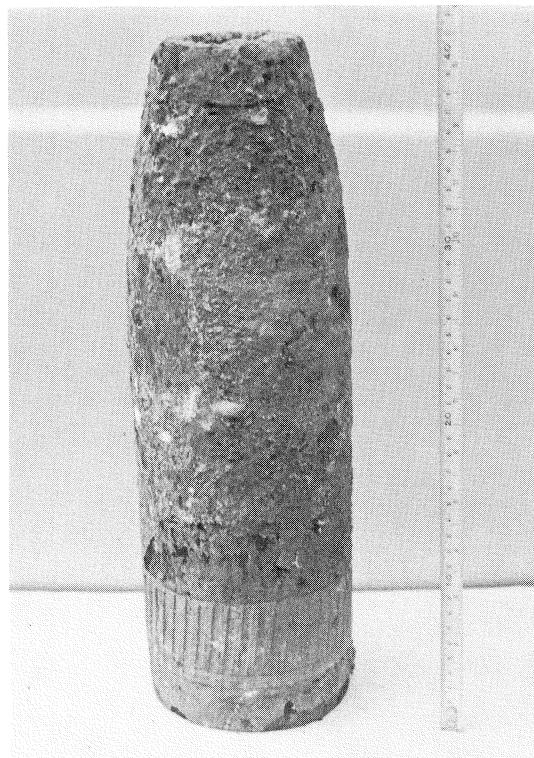
図版-44

黒女瓦片 左大天瓦片

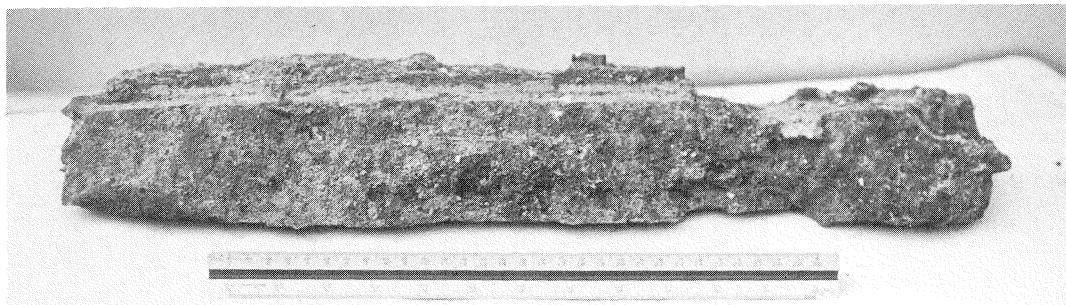


図版-45

磚と円柱片（ニービの骨） 赤



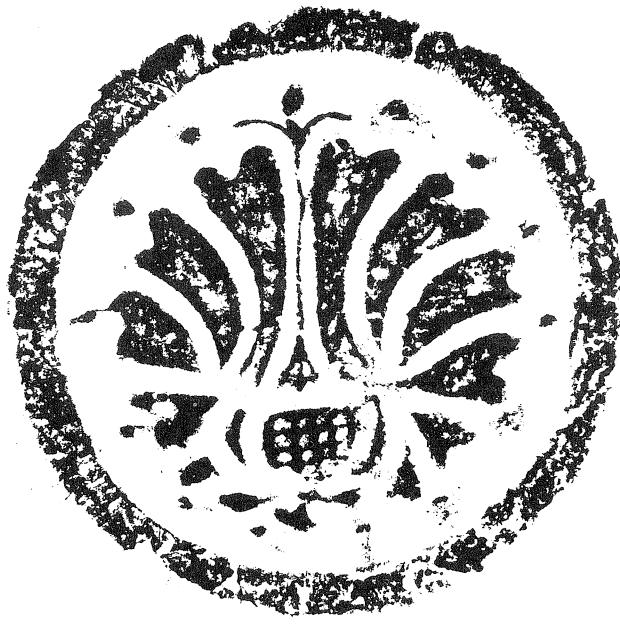
図版-46 125mm 砲弾
(長40.5cm、径12.5cm)



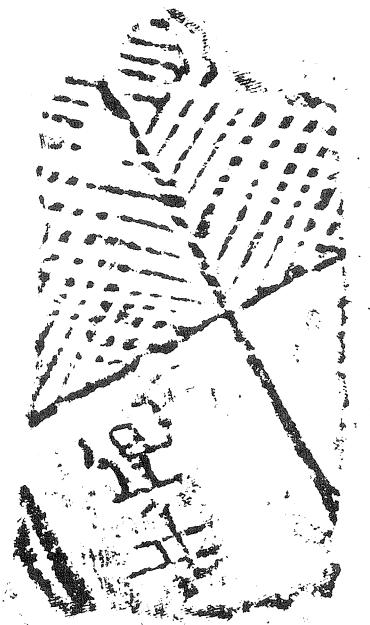
図版-47 砲弾破片 (長53cm、巾16cm)



図版-48 砲弾破片



図版－40 の 黒唐草軒瓦拓本



「年高」銘入り高麗瓦片拓本

IV 結 び

調査の結果久慶門の全容は判明したが、内部東南側は琉球大学の木造校舎があり、またその側を通学路として使用しているため、その部分の発掘は後日を待つ事にした。外部の発掘現状から推して、ここも礎石だけが残っていると推定される。

門の全容は把握出来たので復元設計の資料としては最大の収穫であった。

史跡首里城跡久慶門遺構発掘調査報告書

印刷 昭和51年11月
発行 昭和51年11月
編集 史跡首里城跡久慶門遺構発掘調査委員会
発行 沖縄県教育委員会
那覇市旭町1沖配電ビル内
TEL. (0988) 66-2731
印刷 丸正印刷社
那覇市字国場349-3
TEL. (0988) 32-8484
